

モモの整枝剪定について

平成26年12月
果樹技術普及センター

◆剪定だけではいいものはとれない！

剪定は、結果調節と樹勢コントロールの一つの手段と位置付け、後に続く摘蕾・摘果・新梢管理・施肥などを一貫して適正に行わなければならない。特に樹勢が強い場合は、秋季剪定(9月上旬)を行うと、翌年の反発が少なく効果的であるため、冬季剪定と新梢管理・秋季剪定で調節することが重要である。

◆剪定を始める前に！

樹相診断を実施し、樹齢・樹勢・品種・結果量・土質・前年の剪定程度などを考慮し、剪定程度を決める(表1)。また、主枝・垂主枝が隣接樹と交差している場合は、誘引や縮・間伐を行った後に剪定作業に入る。

表1 成木の落葉期の好適樹相の目安(開心自然形)

構成比	短果枝(10cm以下)	中果枝(10~30cm)	長果枝(30cm以上)
	60%	20~30%	10~20%

1. 主枝の決定

- (1) 2年生時に地上40~60cm付近の枝で、主幹から分岐角度が90度に近く、分岐点の太さの比率が7:3程度の弱い枝を、第1主枝の候補枝に選ぶ。第1主枝と第2主枝たがい反対方向に伸びるように支柱等で誘引する。
- (2) 主枝先端の切り返しの目安は、枝の色の変わり目付近とし、先端の強めの副梢や勢力の強い枝を取り除く。□
- (3) 幼木時代は、骨格形成を第一に考え、主枝や垂主枝と競合する枝以外はできるだけ多く残し、葉面積を確保して樹冠の拡大を図る。

2. 垂主枝の決定

- (1) 3年生頃から、地上1.5m程度から発生した枝の中から第1垂主枝を選ぶ。
- (2) 第1垂主枝は、主枝の側面・斜め下から発生し、主枝に対して太さの比率が7:3程度の弱めの枝を利用する。
- (3) 5年生頃までに、第2垂主枝を第1垂主枝の反対方向に約1m離れた位置から選ぶ。

3. 側枝の配置

側枝は主枝、垂主枝から発生する結果枝を持つ枝である。

側枝全体の配置は、三角形となるようにし、側枝同士が混み合わないようできるだけ小さく保ち、果実をならせては下垂させ、順次更新するようにする。

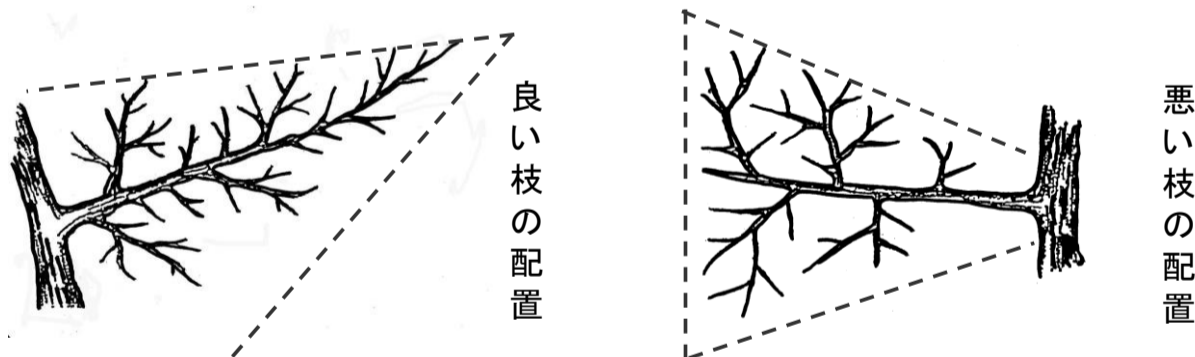


図1 側枝の状態

4. 結果枝の剪定

- (1) 結果枝の剪定には、切り返し剪定と間引き剪定がある。切り返しは、伸ばしたい枝や、樹勢回復を目的に行い、その他は間引き剪定を主体とする。原則として中果枝・短果枝は切り返さない。
- (2) 切り返しの程度は、強い枝は弱く、伸びの悪い枝や充実の悪い枝は、強く切り返し、常に若返りを図る。

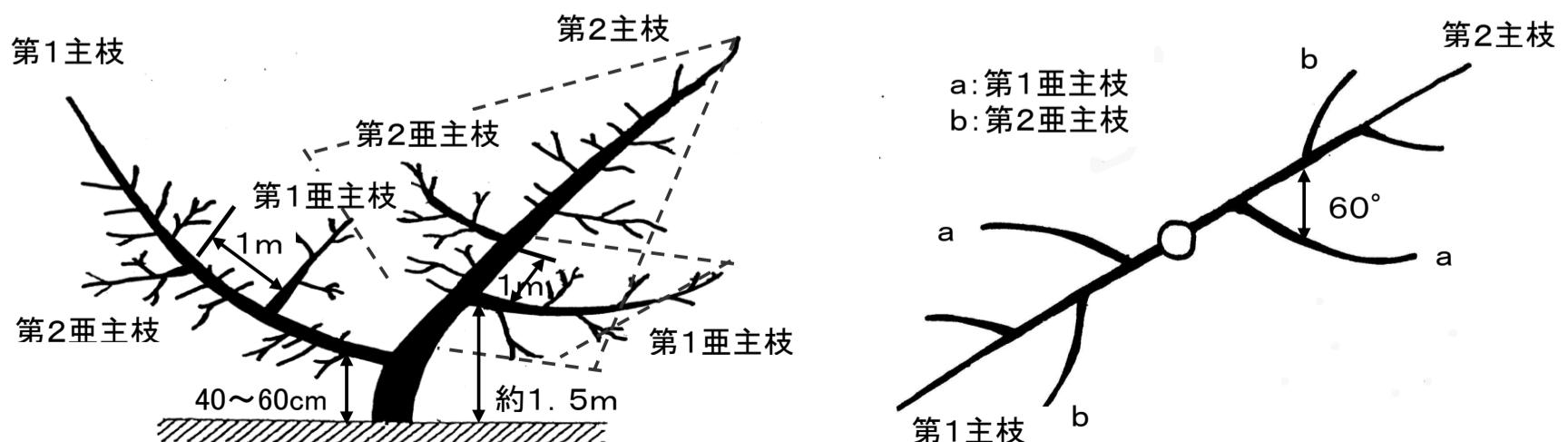


図2 開心自然形(二本主枝)の目標樹形